

グローバル化と生協の課題

庄司興吉（大学生協連会長理事、清泉女子大学教授）

グローバル化に対抗する諸力との関連で、生協など協同組合の力のことを考えている。

グローバル化とは、地球的規模の市場化であり、とりわけ情報化に加速され、さらに電子技術あるいはコンピュータ技術によって加速された市場化で、つづめていえば電子情報市場化のことである。

地球的規模の市場化は 500 年前の大航海時代に始まり、250 前の産業革命とともに本格化した。印刷技術と紙媒体を用いた情報化は並行して進んだが、電氣を用いた通信技術がマスコミに用いられ、ラジオの普及さらにテレビの普及へと進む道が開かれてからは、まだ 100 年もたっていない。第二次世界大戦後に実用化された電子技術すなわちコンピュータが小型化され、ネットワーク化されて、文字どおり地球上の全域を瞬時にカバーする情報通信（コミュニケーション）網が成立したのはこの 20 年ほどのことだ。

こうした技術発展に対応できなかった 20 世紀の社会主義は、まず中国が 1978 年に改革開放に踏み切り、89 年から 91 年にかけてソ連東欧圏が崩壊した。そして、社会主義のこうした資本主義市場への屈服が電子情報市場化の進行を決定的にした。狭い意味での電子情報市場化すなわちグローバル化は 1991 年以降のことと言っていい。

これ以降の地球的規模の市場化は凄まじいものだ。ある人は、産業革命で商品化されたのは労働力で、通貨管理以降の修正資本主義で商品化されたのは貨幣であり、1970 年代までに準備され、グローバル化とともに決定的となってきた「市場化の第三の波」で商品化されてきているのは、自然環境と人間身体だと言っている。経済の外にあってその基礎と見なされていたものがつぎつぎに商品化され、今や地球環境からわれわれの内臓や思想・感情にいたるまで、市場経済の外側にあるものはないのである。

こうしたなかで、商品であることを超えて、市場経済を制御していく人間を取り戻す力はどこから出てきているのか？ 社会を支配する力は、必ず同時にそれ自体を超える諸力を生み出していく、という発想を私はとり続けたい。そのみが、人間が人間であり続けるアイデンティティであろうと思うからである。

何もかもが商品化され、温暖化する地球のうえでわれわれの血液や内臓までが取り引きされるなかで、人間としての生活を取り戻すために、必要なものを自分たち自身で供給しようとする。大部分のものは地球的規模の市場を流れているものを仕入れざるをえないが、それでもできるかぎり産直や地産地消などで、誰がどこでつくっているのか分かるものの仕入れを増やしていこうとする。こうした動きを、フェアトレードなどで国境を越えて広げていく。

生活協同組合の特徴は、生活者としての人間の自発的結社 **association** であるとともに、結社の目的が自分たちのために生活手段を供給する非営利の事業 **enterprise** であることである。事業の継続と量的質的な展開のためには専従・非専従の職員が必要であり、職員が事業に習熟・精通してくればくるほど、市場で活動する他のエンタープライズと変わらない面も出てくるが、日常的にアソシエーションからの規制をかけ続けていけば、生協は、

グローバル化の波のなかで、底辺からその方向と内容を変えていく無数の動きになりうる。

地球上に伸びてきている無数の動きを結びつけていくのは、それこそ電子情報化である。この意味で生協は、それぞれの持ち場で商品供給の可視化に努めながら、コンピュータ・ネットワークをもっともっと巧みに利用し、組織的にも諸単位間の明快ですっきりした連合を進めていかなければならない。諸単位の自立性を強めながら、自発的で効率的な連合を発展させていくことこそ、グローバル化時代の生協の最大の課題である。

(『生活協同組合研究』393, 2008. 10 巻頭言、080828 稿)